
アニマリズムな私生活

Jastice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニメマリズムな私生活

【著者名】

Jastice

N42760

【あらすじ】

運悪く、バイクに撥ねられて病院へと搬送された青年・夏樹国彦は目を覚ました後、自分の周りに起こる不思議な現象を知る。なんとそれは、動物達と話せる事であつた。そんな彼が織りなす……どこか変わった私生活が此処に始まる。

(前書き)

大学祭の出し物、第一段です。

真夜中の病院に一台の救急車が道路の彼方からサイレンを鳴らしてやって来る。

在り来たりな光景だが、物静かな街として有名な、二二三堺町では珍しい光景だと地元の住民ならば大抵はこう述べる出来事でもある。

しかし、救急車はそんな何者の判断に流されもせず、目的地へと一直線で走り抜けて行く。

病院では、入口にて連絡を受けた重傷患者を迎えるべく、医師と看護婦達が緊迫した状態を孕んで様子を窺う。

しばらくした後、ついにその救急車は入口前へと停車し、バックドアが開かれると一人の救急隊員とストレッチャーに乗せられた患者が出てくる。

「救急搬送です。二十歳男性、信号無視したバイクに撥ねられて頭部、及び左胸部を打撲」

「血圧108／60、脈拍106、サチュレーションはルームエアードで98、意識レベル？の10、呼吸困難著明」

医師に患者の容体をいち早く伝えるべく一人は早口且つ明確な声で発する。

「フレイルテストだな。ポータブル撮影の準備を」「はい」

そこから医師達は適切な判断を施しつつ、患者を第一オペ室へと運んでいく。それからようやく手術が始まっていく。多くの時間を費やし、患者は適切な治療を行わていく。記入されていくカルテの名前欄には“夏樹国彦”と記されていた……

そして、手術から三日後、暗闇の世界から覚醒した夏樹はゆっくり

りと目を開け始める。朝日の中の眩しい光が目に沁みて痛覚を刺激されるが目を開けない訳にはいかない。

最初に見た物は見た事が無い部屋に自分に繋がれている酸素マスクであった。まだ思考の覚束ない頭でここはどこかと答えを探し始める。

そうすると、右側にある部屋のドアが突如として開けられる。少し痛む首を捻つて何かと思いながら視線を向けてみると記憶の中で何度か見た姿、看護婦が映つた。一方、看護婦は目の前の患者が目を開けている事に気が付く。

「聞こえますか、夏樹さん？」

先ずはゆっくりと問い合わせるようにして看護婦は夏樹に声を掛けれる。その声に反応して夏樹は目をその顔に向け、ゆっくりと首を縦に振る。

「直ぐに先生を呼んできますからね、しばらく待っていてください」看護婦は点滴を付け終えると確認を取り様にしてその場から離れて行く。

しばらくすると、自分の担当医と見られる人間がこの場に現れてきた。

「夏樹さん、貴方はバイクに撥ねられて約10メートルも飛ばされました。運が良かつたですね。軽い脳震盪と胸部の内出血だけで済みましたから……奇跡としか言いようがありませんよ」

その言葉で夏樹はおぼろげな記憶の光景が呼び覚まされる。十字路の交差点、街灯、ライトの光、バイク、衝撃……事故に遭った直後の光景がフラッシュバックする。

「念の為、夏樹さんには検査入院してもらひます。一週間ほどですが」

これまでに何が起こったか理解できなかつた体がようやく恐怖を感じ始めてきた。何かが違つてたら自分は今ここには居なかつたであらう事実を知つたからだ。今この時ほど、運という物に感謝する事はなかつた。

安心感が得られた所で、夏樹に再び睡魔が襲い始める。精神的な疲れによる物か、徐々に瞼が重くなつていく。

『……でさ、……だよね』

『う……の……かな?』

何処から声が聞こえてくる。囁くように小さな声で聞き取りにくい物であつた。この部屋に誰かが居るのだろうか?動かせる視界の範囲だけでその声の主を探したが、見つからなかつた。

ただ、気付いたのは……開いた窓の向こうにある樹に止まつてチュンチュンと鳴く小鳥が居た位であつた。それに気付いた時には夏樹はもう意識を閉じていた。

それから数日、脳の検査や血液検査、レントゲン等といった検査を取り続けた。それが終わつた午後では何も予定が無い為に暇だったので読書をしたりして時間を潰した。家族や大学の親友達も見舞いに来てくれたりと嬉しかつたが、どこか物足りなかつた。一刻も早く退院したいという意識が強かつたからかもしれない。

だけど、まだそうする訳にはいかないと考えていた。なぜなら、事故に遭つた日から俺は時折、幻聴を聞くよつになつた。それは誰かの会話や独り言といった類の物で、壁の中から聞こえたり、そこからどこからと聞こえてきた。脳の検査では何処も異常は無いとされてはいたが、現にこの現象は何度も起こつている。

「おそらく、貴方の脳には潜在的に事故で起きた当時の映像がビデオテープみたいに再生されているのかもしれません。過去にそういう事例を持った人間も少なくともいます」

「なんとかなりませんか?」

「この場合、貴方自身がどうにかしなければいけません。あの事件を忘れる時を待つしか……」

医師の結論からすればこのように帰つて來た。その頃の俺には仕方がないと思つて割り切つてはいたが、それは間違いに終わった。

それは何時も以上に暑い日であった。やがて、退院の日を迎えて医師や看護婦の方々に見送られながら俺は父親の車に乗つて病院を後にした。病院での生活はどうだったとか、大学への復帰をどうするか等と他愛ない会話をしながらも俺は我が家へと帰つて来た。

たかが一週間ほどしか離れてないのに随分と懐かしい感じがした。決して大きな家とは言い難いが、目の前には立派な一軒家が存在していた。

「じゃあ父さん達は荷物を戻してくるから家に入つていなさい」

「わかつた、けど手伝わなくていいの？」

「病み上がりの人間が何言つてるの、貴方は今日はゆっくりとしないさい」

言われるがままに俺は家中へと先に入つて行つた。嗅ぎ慣れた家の臭いが鼻を通して入つて来る。リビングに入つても、まるで初めてみるかのように見回していた。

あれこれして、夏樹は次の行動に移つていた。言い忘れていたが、此処夏樹家では一匹の柴犬を飼つている。名前はチャチャ丸といい、夏樹が子供の頃に祖父が家に連れてきた今年で九歳になる立派な成犬だ。

つまり、夏樹はチャチャ丸の元へと向かつていたのだ。共にこの家で育つた仲でもあり、いわば兄弟のような存在であるチャチャ丸に久々に己の顔を見せに行こうとしていた。道中、寂しがつてたかもしれない等と想像したりしながらも、彼の犬小屋へと向かつた。

「よう、元気か」

『お久しぶりだな、ご主人』

「いやあ、事故に遭つて一週間ぐらい入院しちゃつてさあ……」

『そいつあ災息つてもんだ、無事でよかつたな』

『全くその通りだ、なんせ……え……？』

この時、ようやく夏樹は気が付いた。自分は今何をしていたのか？会話をしていた……目の前の犬と？そんなことはあり得ない……

「まさか、幻聴がここまではっきりと聞こえるようになるとは、や

つぱり脳が可笑しいのか俺……」

『何があつたか知らんが、俺は』主人の声はちやんと聞こえているぜ?』

今の言葉でもはや俺の中にありえないといつ判断は完全に無くなつてしまつた。

「嘘……だろ……俺が……犬と……喋つている!?」

あまりの驚愕的な事実に思わず叫んでしまつたのは仕方がないと考えられる位、それは凄い事なのであつた。

「どうしたんだ国彦、何かあつたか?」

「いや、何でもないよ…」

「……なら良いんだが……?」

先ほどの叫び声に父が此方に来てしまつたが、何とか平常心を保ちつつ、誤魔化す事に成功した。そして再びチャチャ丸と向き合つ。『それより』飯はまだか、朝から誰もいないから何も食べてないのだが』

「あ、すまん、すぐに用意してくれる……」

何時もの感覚か、ペットに餌をやる気分で言われるがままに、俺はチャチャ丸用のドッグフードを用意しに行つたのであつた。なんだが、いいように使われているような感じがしたのはこの際放つておひや。

翌朝、俺は朝早く家を出て大学へと向かつた。家を出る際にチャチャ丸に固い返事の仕方で行つてきますというと、おう、いつらつしゃいと何処かやる氣のないような声を出して言葉を返してくれた。

それと、この時になつてからようやく俺はこの現象を幻聴ではないと確信するようになつていた。なぜなら、

『何だと手前、二丁目の道は俺の縄張りだろ?が!』

『そつちこそ変な言いがかりを付けやがつて、あの道の電柱には元

から俺の“匂い”が沁み込んでいたじゃねえか！』

『いや違う、俺の方が先に付けていたんだよ！　お前の方が後から付けたんだろうが！』

『何をこんの！』

『そつちこそやる氣か！』

自電車で通る道にて、飼い犬達の縄張り争いが人間の討論のようにはつきりと聞こえてきたからだ。まさか、何時も吠えている裏ではこのような会話が成されていたとは夢にも思わなかつた。

約二十分の通学時間を経て、俺はようやく大学の正門を潜る。これは中州産業大学、主に工学部の入学者が多く、卒業後は殆どの人間が技術者として社会の門を叩く所として地元では有名な場所であった。そういう俺も今年で三年であり、現在建築家を目指す身である。

「夏樹じゃないか！　怪我の方は大丈夫なのか？」

「脳震盪と軽い打撲で済んだから平気だ」

「本当かよ、バイクに撥ねられたって聞いたぞ」

「医者の人いわく、奇跡に近かつただつて」

校舎へに入る途中に仲の良い人間と再会もした。純粋に心配しているたり、ふざけた口調で話してくる。頭にはガーゼとテープニングを付けているため、物珍しそうにこちらを窺う者もいた。

俺は履修している授業の教室へ入り、荷物を机に下ろす。二週間ぶりだとしても、この行動は一種の日常的行動として体に刷り込まれており、普通にやれた。

「夏樹君！？」

その時、後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。それは夏樹にとつて聞き覚えのある声でもあった。

「久しぶりだな、彩花」

小宮彩花、夏樹と同じ大学に通う大学生であり、彼とは大学の授業で知り合い、必要な時にはレポート作成での相談相手として幾度

か話し合つ中もある。あと家がケー・キ屋で彼女はお菓子の類を作るのが上手である。しかし、それに比例して日常的な料理があまりうまくできない。

「痛そうだね、頭にある傷」

「なあに、こんなもの掠り傷みたいな物だ」

「そつか、でもよかつた……事故のことを聞いた時、一時はどうなるかと思つたもん」

「おや、心配してくれていたのか？」

「当たり前だよ、夏樹君がいなくなつたら誰が私のレポート作成手伝うのよ」

「なんだか俺の価値が低いような気がするな……」

しばらくは会話に花を咲かせて何気なく時間を過ごしていく。

「そうだ、退院祝いとして今日は私の店に来てよ、今週発売した新作のケー・キ割引して売つてあげるからさ」

「無料じゃないのかよ！」

意外に店番を任される身でもあるのでちやっかりとしていた。

今日の授業がすべて終わり、これ以上用のない者達が大学の門から一人、また一人と出ていく。その中に入っている一人もその一部だ。彩花も今日はサークルが無い為、夏樹と共に家に行くには丁度良いタイミングとなつたのだ。

夏樹はいつもと違う道に自転車を走らせ、彩花の家へと向かう。長年の付き合いもある為、結局は切つても切れない仲なので、彼は彩花の提案を受け入れた。

彼女の家へ行くまでに時間はそつかからない筈だと心の中で思いながら夏樹は自転車のペダルをこぎ続けていくのであった。

「ねえ、事故の被疑者はどうなつてているの？」

「刑事裁判で今頃過失致死未遂の罪状で裁かれているんじゃないかな？」

そういうえば、バイクの運転手はわき見運転をして俺を撥ねたために、俺が入院中の間で両親がすぐさま起訴の届け出を出していたそうだ。この事故の結末は、今度は裁判に委ねられる事となつたということだ。

彩花と事故についての事を自分の視点で説明しながら進んでいくうち、いつの間にか店が近くなつてることに気が付き、ブレーキを握る。

店脇にある駐輪場に一人は自転車を置いて、それから一人は店内に入つて行つた。

「ただいま」

「お帰り彩花、今日は早かつたね」

「今日はサークル休み」

「そうか、ん……夏樹君じやないか！」

「お久しぶりです、小宮さん」

今、目の前にいるのがこの店のパーティーシエであり、彩花の父である小宮慎一である。彼とは偶に遊びに来る時や、ケーキを買う時に何度か会つたことがある人でもある。

「病み上がりだそうだけど、大丈夫かい？」

「運動機能には別に異常がないから大丈夫です」

「それはよかつた、じゃあどうぞ一階でゆっくりしていってくれ」

小宮家の本当の家はこの店とは違う別の場所にあるが、この店も一階は作業場、二階は自由部屋として使われることがある。

そのため、騒がしくしない限り自由にできるから自分の家より都合が良い場所もあるので彩花はここを良く訪れていた。

二人は一階に上がって二つの内の片方へと入つた。ちなみに、もう一方が作業員達の休憩部屋となつていて。

「あ、ココいたんだ！」

部屋の扉を開けると、中には一匹の白ネコが現れる。この猫はこの店で飼われている「ココ」という名前の猫であり、イメージキャラクターとして店の看板を飾る存在でもあった。

「いい子、いい子……何か飲み物持つてくるから好きに座つてね」「ああ、わかった」

彩花はココの頭を軽く撫でた後、先ほど言つた物を取つてくるべくこの部屋を出していく。

そして、この部屋には一人と一匹だけが残つたという訳だ。

「……よお」

『馴れ馴れしいわね、こっち寄らないでよ』

意識をココに向けると、例の現象が現れ始める。彼女“自身”的心が頭の中に響いてきたのだ。

その一方、ココはフーッと鳴いて部屋の隅に居ながら夏樹を威嚇していた。実は、夏樹はこの猫に前から好かれていらない経験があった。なぜこうされているのか今まで分からずしまいだつたか、改めて真相を聞けるかも知れないと考えた。

『まったく、なんでこんな奴がアヤカと私の部屋に……』

「こんな奴で悪かつたな、第一、なんで俺の事そんなに毛嫌いするんだ？」

『……つて嘘！アンタ私の言つことわかるのー？』

「まあ、最近になつてからだがな」

ココは夏樹の返信に予想通りの反応を示した。動物自身、自分達の言つことを人間は理解することはないと確定しているだけあって、その反応は予想通りの事であった。

しかし、なぜかチャチャ丸は落ち着いていたが、年の功とでもいうのだろうか？

『全く信じられない……何でアンタみたいな人間に私達動物の声がわかるのよ』

「そんなこと俺に聞いたつて分からない物はわからん。それにお前こそ何で俺の事を顔会わせる度に威嚇してくるんだよ

『そんなの決まっているじゃない、私の主人たるアヤカとその家族以外の人間に敬意を払う必要なんてないからよ』

「餌を貰つたり、世話をしてもらつたりされているからか?』

『そのとおりよ、アヤカは私にとって命の恩人なんだから……あの雨の日、行く当ての無かつた私をアヤカが偶然見つけてくれなれば……』

『そりいえばお前、捨て猫だつたんだつけ』

『口の事は昔、彩花に聞いた事がある。それだからか……こいつが彩花達以外の人間に懐こうとしない理由は』

『それより早く出て行きなさいよ、アンタが居たら私とアヤカの遊び時間が減っちゃうじゃないの』

『そうは言われても、誘われた身だから口の言うとおりに出て行つたらそれは失礼だと思う。それにしても、考えている事が分かるようになると改めてムカついてきたな……』

『よし、ここは一つ反撃と行こうか。

『残念だな、今日は折角お土産を持って來たというんだが……』

『そう言いながら俺は鞄の中から袋に入つた“ソレ”をちらつと見せつけてみた。

『そ、それは!』

『そうだ、お前の大好きなマタタビだ!』

『毎回会うたびに威嚇されて來たから、対策として鞄に常時携帯して持ち歩く事があった。今回も彩花の家へ行くからという事でこれを一応持つて來ていたのだ。

『それで私が釣られると……』

『ちなみに、今回は少し高級品も混じつた品だ』

『なぬつ!?

『店員曰く、香は通常の一倍の効果だ』

『つぐづぐ……』

夏樹は口に甘い誘惑をするかのように手に持つ袋に入ったマタタビの素晴らしさを説き続ける。その説明を聞いていると溜まらず

「『はい』とし始め、ついには涎を垂らし始める。

「ほれ、先ずはここにおーつ」

夏樹は袋に小さく穴を開けてそこから一欠片マタタビを右手に乗せた。

『ああああーーー』

対して『はい』のプライドかマタタビを取るかと意思の天秤を左右に揺らしていた。どう見たって、そろそろ陥没しそうなのは時間の問題だと思った。

「それじゃあ……」

その時、夏樹はマタタビを握った右手を大きく振りかぶり、

「行つて来い、『はい』！」

開いていた窓からそれを力いっぱい投げてやつた。

『ああっ、私のマタタビがああーーー！？』

その行方を追つて『はい』は窓から外へと飛び降りて行つた。

「ふ、所詮は猫という事か」

その様子を見送つてから夏樹は窓を閉め、オマケに鍵を閉めておぐ。

「んつ？」

その時、夏樹の懐が震え始めた。ポケットに手を入れてみるとナーモード中の携帯電話が鳴っているのが分かつた。すぐさま携帯電話を開いてみると、その番号はなんと、自分の家の番号であった。

「はい、もしもし」

「もしもし、お母さんだけ……今日家に親戚の人達も来るそういうの。だから帰つて来てくれないかしら?」

「それは本当か?」

聞く事によると、退院祝いとして自分の為に家に来てくれるらしい。だから、主役である自分が居なくては話にならないとのことである。

「……わかった、直ぐに帰るよ」

「そう、じゃあ出来るだけ急いでね」

そう言つと、電話が切れる。それと同時に部屋のドアが開かれる。

「お待ちどう様、それじゃあ飲もうよ」

「いや、『ごめん。急遽用事ができちやつてさ……今から家に帰らなければならぬんだ』

「ええ、それ本当!?」

彩花はその言葉に残念そうな表情をしていた。せっかく誘つてもらつたのに悪いが家の用事となつては断りようがない。

「『ごめんな、また今度おねがいできるか?』

「…………うん、わかつた……」

夏樹は了承を得て自分の荷物を再び手にし始める。全てが収まつた所で出口へと向かつて行つた。

『ちょっと、開けなさいよ! あ~け~な~そ~いつてば!..』

その横でカリカリと爪を立てて窓を開けようと必死にしている口の姿を見ながら……

その夜では宴会に近い退院祝いが行われた。とはいっても、殆どが父と叔父と祖父の酒宴のような物ではあつたが、いつもより豪勢な料理が奮われていたので満足であつた。その中で病院の事とか大学はどうだとか進路はどうするとか他愛ない会話が幾度かあつたが楽しめた。

「あーもう食べれない」

欲張りすぎて腹に収めた料理は夏樹の胃を張らせるほどに入つていた。今彼は縁側で座つて夜風に当たつているのだ。

『何時も以上にドンチャン騒ぎだつたな』

「父さんも父さんだ、少しやり過ぎなんじやないかな」

『別にそれが悪いとは思わないけどな、就寝時間が早い俺にとつては睡眠妨害の何物でもないんだが』

「それは……すまなかつた」

『ご主人が謝る事じやないさ、『ご主人のせいではあるまいし』

動物と話せる事には利点ばかりが今の所、存在している。何がない、どうなつていてる等と見てくれじゃ分からぬ事がはつきりと分かる様になるからだ。もはや俺はこの現象を楽しいと感じてしまうようになつていたのだ。

「明日は休日だし、久しぶりにお前と散歩に行くか」

『そいつはうれしいねえ、お手柔らかに頼むよご主人』

大学の為、チャチャ丸の散歩はこの頃、母か祖父にまかせつくりだつた。これまで以上に意思疎通ができるが故に親近感を覚え始めた夏樹は滅多にする事のないチャチャ丸の散歩をすることを約束する。

その翌日早朝、夏樹とチャチャ丸はやや駆け足で住宅街の道を通り抜けていた。『よく稀にでも散歩のコースは今でもなお、しつかりと覚えていた。

「はあ……はあ……」

『限界かい？』

「けほつ……誰が！」

『そうかい、じゃあペースを上げてみようか？』

「ちょっと待て！ これ以上は本当にキツい……」

ただ最近、自転車以外の移動手段を行つていなかつた為に夏樹の筋肉は鈍つっていた。普段使われてなかつた筋肉が悲鳴を上げ、夏樹の顔を苦痛に歪ませる。

『ほれ頑張れ、目標まであと半分だ』

「ぐう……！」

対してチャチャ丸は当然ながらと余裕に走り続けている。散歩という毎日の運動で使われ続けたチャチャ丸の筋肉に衰えなど微塵も存在していなかつたからだ。

そして、中間点の公園を通りかかつた所、不思議な光景を見る。近所で何度も見かける中高年の女性が自分より小さな排水溝を

必死に覗いているのだ。しかも、何か呼びかけるようにして声を小さく出していた。夏樹は不思議に思つて女性に声を掛けてみる。

「あの、どうしたんですか？」

「ああ、ちょうど良かったわ……ちょっと手伝ってくれない？」「何を……ですか？」

そう言いながら先ほどから女性が覗いている古い排水溝の中を一緒に覗いてみると、なんとその中には小さな子犬が奥に佇んでいた。「おばさん家のドグちゃんっていうんだけどね……興味本位で此処の中に入つて行つたら出て来なくなっちゃつたのよ」

そう説明を終えるとすぐさま再び呼びかけをし始める。どうにかして、自分も手伝おうと排水溝の構造を予測して少しづつ辿つてみてみた。

「ここは……」
「」

そうして作業を続けている途中、犬の吠える声が聞こえてきた。何事かと思って見てみると、なんとチャチャ丸が排水溝の穴に向かつて吠え続けているのだ。

「こ……この馬鹿犬！　ウチのドグちゃんを怖がらせて余計出て来なくなつたらどうするの！？」

当然、女性はその行動に対して怒つた。だが、俺の脳の中でチャチャ丸の考へてる事が響き渡る。

『馬鹿はどうちだ……出て来いつて言つてるんだよ……』

『の考へを聞いて俺は思わず苦笑してしまつた……』

そんなこんなで約三十分が経ち、ようやく子犬のドグは排水溝から出てきた。何故排水溝から出て来なかつたのか疑問に思つていた所、彼の心が言うには、

『この人、僕の事を着せ替えばかりするから嫌なんだもん……といったボイコット的な理由が事の成り行きの原因であつたそうだ。』

さすがに三十分も立ち往生したり排水溝に潜ろうとしたりと行動を起こし続けた所、夏樹は疲れてしまった。傍にあるベンチに腰掛け、一先ず休息を得る。

「時間かけすぎちゃったかな……」

そろそろ昼食が用意される時間だ。家に居る家族も自分が何処に居るかと疑問に思つてゐるに違ひない。

「チャチャ丸、そろそろ帰ろうか」

『了解、こつちもちょうど腹が減つた』

互いに返事を返し、少し重たい足を立ちあがらせ、残りの散歩の道を歩き出す。ここからは住宅街なので規則的な道順に沿つて行けば予想より早く家に帰れそうだ。

『くそ、中々良いモンがねえな……』

その時、何処からか声が頭に響き渡つた。どうやら何処かに動物がいるようだ。何処かと辺りを見回してみると、とある場所でガサガサと動き回る物体が目に映る。鋭い嘴、大きな翼、全身が黒のフオルムと統一されたそれは…… ちょうどゴミ捨て場を漁る一羽のカラスであった。

『おい人間、見世物じやねえぞ』

カラスは此方に気が付き、甲高い声で鳴いて此方を威嚇し始めた。

「……すまない、邪魔をしたか？」

『……何だこいつ、俺と話をしたいつもりか？』

「まあ その通りだな」

初めは適当に返事をしてきたかと思つたが、一一度目に完璧に口の言葉に相槌を打たれた事にカラスは驚愕した。

『いやまさか、お前……俺の声が分かるのか？』

『実を言つとそなんだ、はつきりと聞こえる』

またもや言葉を返されてカラスは眉を顰める。

『まだまだ世の中は広い物だな……こんな事があるとは』

『何か悟つたと同時に、カラスは再びゴミ捨て場のゴミ袋を

漁り始める。もはや夏樹の事は眼中にないと言わんばかりに……

「いや……その……」

『何だ人間、俺は今日の食事探しで忙しいんだ。お話をしたければまた今度にしな』

『そんなこと言つなよ、俺とお前の仲じやないか』

『何時から俺とお前はそんな関係になつたんだよ……お、焼き鳥発見!』

「…………」

『どうやら向こうには全く関心を持つていないそうだ。それより先ほどこのカラス、ゴミ袋に入つて焼鳥をおいしそうに啄んではいるが、夏樹はそれを共食いと言つじやないかとやや気にしていた。』
『そうだ人間、今日会つたのも何かの縁だ……折角だから教えといてやる。今夜はこの辺りを通りを通りをするなよ?』

「それは、どういう事だ?」

『他の仲間達から聞いた話だが、最近ここらあたりで物騒な事件が起きているらしいんだ。ようするに、気をつけろという訳だ』

そう言つて、カラスは嘴に串を加えたまま何処かへと飛び去つて行つた。

「何だつたんだ、一体……」

夏樹は先ほどの言葉の意味を疑問に思ひ続けていた。

その後、よつやく自宅に帰宅した夏樹は遅めの昼食を取つてから来週が提出期限となつていてるレポートを仕上げる為に自室でパソコンと向き合つていた。

文字を書く為のタイピングの音が静かな部屋で延々と響き渡る。その動作の中、夏樹はあのカラスの言つた言葉を今もなお疑問に思ひ続けていた。

「いつたいなんだつて言つんだ」

何処かで聞いた話だが、動物には危険を察知する予知能力を携えているという説が出された事がある。それから考へるに、あのカラ

スはあの場所で何か危険が迫っていると察知していた事となる。

「その危険がなんなんだか……」

考へても思いつく事が無く、少し行き詰ってしまった。

「テレビでも見るか……」

夏樹は息抜きとして、部屋にあるテレビの電源を入れ始めた。電波を受信し、ブラウン管を作動させ始めたテレビは次第に画面を映し出す。

番組はちょうどニュースの所だつたらしく、他に面白い番組は無いかとチャンネルを変えようとした。

「んつ……？」

だがその前に、夏樹の目にはとある物が映っていた。事件について報道している物の文欄に記されている場所の名前であった。

“白沢市”ここ三堺町の隣町である筈の場所であつたからだ。リモコンをテーブルに戻し、普通は聞き流す筈のニュースを見入る様にしつかりと聞いていた。

『今日晩ごろ、買い物の帰宅途中であつた　さんが何者かに後ろからナイフで刺され、重傷を負う事件が発生しました。現在、さんは病院にて意識不明の重体とのことです。　さんを刺し、逃走中の通り魔の姿は目撃者からの証言からして……』

これを見て俺はカラスの言つていた意味が分かつた気がした。おそらく、この通り魔が三堺町に現れるかもしけないと……アイツは警告したのだ。

だけど、分かつた所でどうする？　警察に言つ……カラスが教えてくれたなんて誰が信じると思うか。自分がなんとかする……何をどうやってだ。

何も思いつきはしない……そもそも、一般人である自分が犯罪者にどう立ち向かえというんだ。逆に此方が聞いてみたい。

そう試行錯誤していると、突如ピリリと携帯が鳴り始めた。少し

驚きながらもそれを取つて画面を見てみると、そこには小宮彩花と表示されていた。

「はい、もしもし」

「あ、夏樹君？ 今家にいるかな？」

「その通りだが、何か用か？」

「ほら、昨日話した新作のケー・キがあつたでしょ？ 実は家のお父さんが夏樹君の退院祝いとしてぜひ持つて行きなさいって……だから今夏樹君の家へ向かってるんだ」

「今からか？ 明日も休みだからそっちの方がよかつたんじやないか？」

「私もそう言つたんだけどね、お父さんが早い方がいいっていうから仕方なく……」

外を見ればもうすぐ夕口が沈む頃だ。もうすぐ六時になるかもしないという時間帯で彼女は此方に向かっているそうだ。

「今は近くの公園付近の道を通つてるから、もうすぐ付くと思つから待つってね」

「……公園付近？」

まで、あのカラスが言つてた場所はその辺じゃなかつたか？

「じゃあそろそろ切るから……」

「彩花、そこいら辺の道はなるべく早く通つ過ぎる……」

「え、それつてどういう事？」

「いいから言つとおりにしてくれ、さつきコースで聞いたんだがな……隣町から通り魔がそこいら辺に逃げて（ガシャガシャン

！…）おい、どうした！！」

突如として響き渡つた衝撃音が携帯越しから聞こえてきた。

「な、何するんですか！？ いきなり私の自転車を蹴飛ばして……！」

「！」

その後の会話は聞こえてくる事は無かつた……何かの破壊音が聞こえたと同時に通信不能の電話音と切り替わってしまった。

「……くそ……」

夏樹は即座に自分の部屋から飛び出して階段を勢いよく下つて行く。その後には玄関へ向かい、急いで靴を履き始める。

「何処行く気？ もうすぐ夕飯できるわよ？」

何も知らない母の声が後ろから聞こえてくるが、夏樹は構わず玄関を出て行く。そして、車庫の隣に止めてある自分の自転車を鍵を外して乗り出す。一心不乱にペダルをこぎ始めた。

『どうしたんだご主人、こんな時間で大急ぎで家から飛び出して？』

『彩花が誰かに襲われた！ 恐らくあのカラスが言っていたことだ！』

『何、あの譲ちゃんがか！？』

チャチャ丸もその言葉に驚きを表す。チャチャ丸にとつて、小宮彩花は小さい頃から自分を知る者であり、夏樹と同じく良くしてくれた人物であるからだ。そして、夏樹は家の門から出て、今、彩花が居るに違いない公園辺りを目指し出す。

『待つてくれご主人……おい！！』

チャチャ丸は吠えて夏樹を呼び止めようとしたが、それは聞き入れられずに段々とその姿が遠くなっていくのだった。

その頃、彩花は絶体絶命のピンチに陥っていた。いきなり通話中に自転車を横から蹴られて振り落とされた時、その行動を起こした人間に怒りを覚えたが、次の瞬間それは恐怖へと変わった。

ナイフを見せつけて来たからだ……その人間、姿からして男は彩花のその顔を見るや、なんと笑ったのだ。まるで獲物を見つけた狩人のように……

当然、その様子を見た彩花は倒された時、アスファルトにぶつけた体の痛みを我慢しつつ、近くにあつた公園へと逃げ込んだ。決して後ろを振り返らず、ただひたすらに走り抜けて行こうとした。だが、この身は女性、男性の体力には敵う筈もなく、徐々に距離を詰められていった。

そして、例の通り魔はその背中へと腕を伸ばしている所であった。足が彩花より速い為、その手は彩花の背中の服をしっかりと掴み上げた。

その感触に彩花は叫びを上げ、振り払おうとするが、すぐさま通り魔に手で口を塞がれ、次には強引に押し倒された。

「……!?」

叫び声とならない声をそれでも上げ、なんとか通り魔の拘束を振り払おうとする。だが、完全に抑え込まれていての大した抵抗も出来ないで居た。

しばらく暴れていたが、彩花は眼を見開いた。なんと、通り魔が右手に持つナイフを大きく上げて此方に向けているのだ。おそらく口封じの為に自分を……

彩花はより一層暴れてそれから逃れようとすると、残酷にも彼女は無力に等しかった……が運命は最後まで彼女を見捨てようとはしなかった。

「この野郎……！」

後ろから夏樹が通り魔の頭を太い木の枝で叩きつけたのだ。どうやら彼は間に合つたそうだ。突然の激痛に通り魔は思わず頭を抑え始める。そこを狙つて夏樹は通り魔の体を横から蹴り押した。

通り魔が離れた為、自由になつた彩花は夏樹の傍へと寄る。恐怖と不安で思わず腕を掴みながら夏樹の後ろへと隠れた。

「早く逃げろ」

「でも……」

「なら警察を呼べ！」

「う、うん……！」

長話をしている暇はない。夏樹は必要最低限に伝える事を伝え、彩花はそれを素早く理解する。

「くそつ……！」

その時、此処で初めて通り魔が声を出した。その声は夏樹に向けての悔しさがはつきりと表れていた。

「邪魔しやがつて……手前……」

「黙れ、どうして人を襲つたりしたんだお前は……？」

夏樹は男の行動が疑問に思えて仕方が無かつた。目の前の存在がしようとした事を許しはせずにその真意を問う。

「うるせえ！ 僕の楽しみを奪いやがつて……」

「楽しみ……だと？」

つまり、こう言つているのだろう。ムシャクシャしたからやつた、気に入らないからやつた等と自分勝手な理不尽で事を起こした人間に違ひない。今時起ころる犯罪での典型的な存在だ。

「ふざけるな！ そんな事の為に隣町の人を刺したのか！？」

「へえ……もう知れ渡つているんだその事」

しかし、通り魔はその事を自慢とばかりに薄ら笑いの表情で言つてきた。この男を逃がしてはいけない、自分の本能がそう告げていた。

「観念しろ、アイツが今警察を呼んでいるからアンタが捕まるのも時間の問題だ」

「あ～あ……結局一人までしか遊べなかつたか」

「強がりも大概にしろ！」

「仕方がないな……」

最後はお前にするか

そう呟くと次の瞬間、男はナイフを取り出す。その行動に夏樹は危険を感じ、後ろへ下がり始める。

「待てよ、折角だから遊ぼう……ぜーーー！」

その言葉の次に、男はナイフを振る。小さなバタフライ式のナイフだが、刺される場所が悪ければ死ぬ可能性もあるのだ。夏樹はそれを必死に避ける。

そして、十回ほど同じ行動が起こった時、夏樹は運悪く転んでしまった。自転車で急いで来た為に疲労が少なからず蓄積していた為

であろうか。

そこに男のナイフが襲いかかる。だが、右腕を犠牲にして急所を外し、地面に転がりながら男の傍から避けた。

だが、極度の緊張により夏樹はもはや満身創痍であった。これ以上は動く事ができず、次に来るナイフの脅威に目を瞑つた。しかし、そこに“彼”は現れた。

『ご主人に何してやがるんだ手前！』

そう、チャチャ丸であった。彼は自分から首輪を強引に外し、遅れながらも夏樹の跡を着いて来ていたのだ。幾らかのタイムロスを経てチャチャ丸は自分の主人の危機を救うべく、通り魔の左足を後ろから噛み付いた。

「いてええええ　！」

犬の噛む力は意外と強靱だ。男の足はズボン越しに犬歯が肉に食い込み、たまらず悲鳴を上げた。男は噛み付いてきた犬を振り払おうと暴れるが、チャチャ丸の顎はそれを許さず、さらには足を引き摺ろうと引っ張り始めた。

仕方が無いのでナイフを使おうとしたが、それを掴む右腕に突如強い衝撃が襲い、堪らずナイフを落としてしまった。目の前を見ると、夏樹がいつの間にか先ほど使った木の枝を手に握りしめていた。夏樹は残った力を使って男にタックルを叩きこんだ。その衝撃で男もろとも倒れ込み、夏樹は動きを封じる為、体全体を使って抑え込む。それに抗って男は何度も殴つたりしてきた。だが、夏樹は決して放そとはしなかった。痛みで意識が朦朧とし出した所、サイレンが遠くから聞こえてきた。ようやく警察が来たのだ……。そう確信した後、夏樹は意識を手放した。

その後の記憶はハツキリとはしていない……覚えてているのは救急車に乗せられて搬送されたという事だ。今月で一度も救急車に乗ることになるとは滅多にない経験に違いない。

それと、あの通り魔は警察に逮捕され、彩花も軽い擦り傷以外は怪我はなかつたらしい。俺も軽傷で済んだらしく、一日で病院を出れた。今は落ち着いてようやく家に戻れたという訳だ。

『無茶するよ本当に……俺が来なかつたらどうするつもりだつたんだよ?』

「さすがに反省してるよ、もう一度とあんな事なんてしない」

右腕に包帯を巻いた姿で夏樹はチャチャ丸と縁側でのんびりと会話していた。病院を出た後日、警察に感謝状を贈られたり、彩花の家族に感謝されたりと色々起きたが、やはり家で静かにしている方が俺には性に似合つてる。

『ケケケ……悪運が強くて何よりだな人間!』

「うるさい、お前は黙つていろ」

実は、今日はこの家にもう一匹来ている。今回の原因といえるあのカラスが居るのだ。なんでも、俺が忠告を無視してあの場所へ向かつたからどうなつたのかと様子を見に来たらしい。

『やっぱり面白いなアンタ、なんだかアンタを見ているとまた面白い事が起こりそうだな……』

「お前、仲間から性格悪いと言われてないか……?」

『さて、そいつはどうだらうね?』

カラスはとぼける様な顔をして俺の事を壇の上からじっと見ていた。言葉からするに、絶対言われているだらうと俺は心の中で悪態をついた。

『これからも偶に此処に来るぜ、楽しみにしている事だな?』

『一度と来るな!』

そう叫んだ後、カラスは笑いながらどこかへと飛び去つて行つた。

『すっかり動物との会話に馴染んじましたな、ご主人』

『……もういい』

もはや自分の異常にについては考えない事にした。これからはこの能力と共に暮らしていくなければならないので、考えているだけ時間の無駄である。

『まあ、元気にならへんやあ』

「……まあ」

夏樹は動物に慰められる口が来ようとは考えもしなかった為、実際にやられると思わずため息をついてしまった。

かくして、夏樹国彦は動物との意思疎通が可能となつたために、今後とも奇想天外な私生活を送る事となつたのである。その先に待っている物はいったいどのような物か……それは神のみぞ知るのであつた。

(後書き)

今回はやや短い出展となりましたね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276o/>

アニマリズムな私生活

2010年10月21日01時25分発行